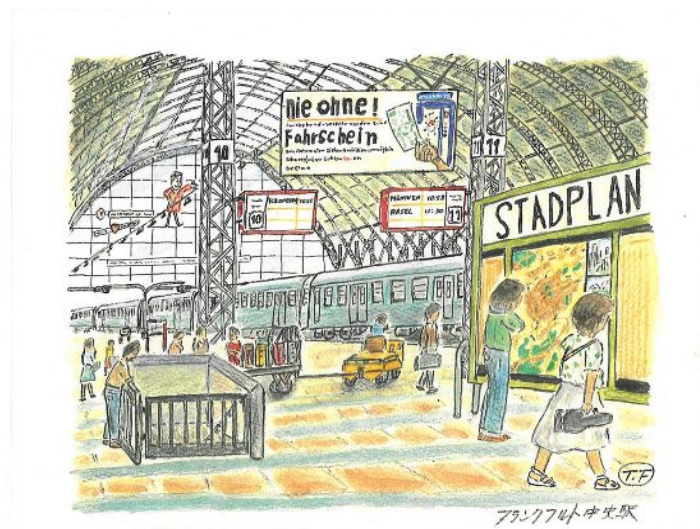


西欧・東欧見聞録

(ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行)



西欧・東欧見聞録（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

旅慣れた頃（デンマーク、西ドイツ、スイス）

東側諸国の重苦しい旅のあとのせい、これからの西側諸国の旅はなんとなくお気楽に感じられる。心身ともに身軽になってまずはコペンハーゲン駅の構内にあるインターレールセンターで一休み。ここでまた宿を確保する。デンマークは物価が高いと聞いていたので、贅沢はできない。安い宿といったら YMCA を勧めてくれた。

ここで無料の立派な市街地図をもらい、YMCA の場所を地図に記してもらいそこに向かった。コペンハーゲンの駅前、世界的に有名な遊園地のチボリ公園。YMCA に向かい、市庁舎広場からユングェンス・ニュートウ広場に至るストロイエという繁華街を歩く。これは 1.2 km に及ぶ歩行者天国である。まだ朝早いためか、店はしまっている。

信号待ちのときに、そこにいた旅行者らしい女の子に話しかけたが、彼女はオーストラリアから来て、これから YWCA に行くところだ、とのことだった。町は、霧雨が降り、なんとなく寒々としている。日本では、初冬の曇り気である。さすがに緯度が高いせいもある。ちなみに 7 月は、デンマークでは年間でもっとも暑いときであるとの事だが、最高気温は 22 度だそうだ。

そうこうしているうちに St.Kannikestræde 19 の YMCA について。早速、宿の受付をする。このときも、ドイツ語圏での旅行が長かったためか、最初にドイツ語を使い、しかも申込書にコペンハーゲンの前の最終滞在地を書く欄があり、これにベルリンと書いたら、ベルリンに住んでいるのですかね？と聞かれた。値段は安かったが、ベッドナンバーを聞いて、そこに行くと、体育館のようなところにベッドが 100 個程度おいてあり、まるで雑魚寝のようなものだった。がっかりしたが、まあ仕方ないことだとあきらめ、荷物をおいて散策に行くことにした。幸い雨は上がっている。

近くの駅から真っ赤な国電で、数駅先のヘルシンボーまで行って引き返す。婦人に話しかけられる。カメラバッグの名前をみて不思議そうな顔をしている。町は寒々として、まさに北欧の町の印象である。海沿いの北側エステルポート駅から歩いて散策をする。ときおり天気雨になる。形が五稜郭に似ているカステレット旧城の周りを歩いて人魚の像へ行って見た。これは、よく言われることだが思ったよりちっぽけとしていてなあーんだという感じである。周囲はコペンハーゲン港で、大きな客船も停泊している。バルト海の連絡フェリーなのであろう。また、コペンハーゲンはジャズの町として有名だが、たしかに運河沿いのニューハウン（新しい港を意味する、船乗りのたまり場）には、サクソや楽器片手の大道芸人がたくさんいたし、ジャズの演奏があちこちから聞こえてくる。

アマリエンボー宮殿（デンマーク王室の王宮。毎日正午に衛兵の交替式がある。）の周りを散策して再び市庁舎の方向へ。昼飯はどうしようかと思い、マクドナルドに入ろうとしたら、日本と言う 3・8 セット（380 円）が何と 48 クローネ（1 クローネ 25 円、つまり

1200 円相当) と知ってあきらめた。これじゃ、デンマークじゃあまりいい食生活はできそうもないと思った。コペンハーゲン滞在は 1 泊だけにしよう。中央駅に向かって歩きながら、安そうな店を探したがなかった。しかたなく駅構内のスーパーで、牛乳とパン、ハムを買って、チボリの前のベンチで食べた。ついでに絵葉書に、無事共産圏を抜けて、いまコペンハーゲンにいるとしたため構内の郵便局で出した。

腹がいっぱいになったら眠くなった。そういえば、昨日の列車では、東ドイツ国境越えでもあり興奮して眠れず、ほとんど一睡もしてなかったのだ。一度 YMCA に戻り昼寝をした。疲れた身には、ベッドが確保されているだけでもありがたい。しばしの間熟睡してしまった。目が覚めると、もう午後 5 時くらいになっている。再びニューハウンのほうに行ってみる。一層にぎやかになっている。ライブハウスに立ち寄りたのはやまやまだが、値段を考えるとあきらめざるを得なかった。大道芸人のレベルの高い演奏を楽しみながら、そぞろ歩いた。YMCA の近くの、大学の構内と思われる広場では、サクソ奏者 5 人のクインテッドが演奏を披露していた。めちゃくちゃうまい。

疲れもとれ、雨も上がり気分爽快でストロイエへここでは、家族と思われる芸人がパフォーマンスしていた。夕飯は奮発してマクドナルドに行こう。例の 1200 円相当のハンバーガーセットを食べたが、やはり日本の 380 円のものとは変わらなかった。貧乏人にとってはせめてもの贅沢である。市庁舎前広場で、美しい夕暮れを見ながら YMCA に戻った。

一人の日本人に話しかけられた。彼は、私が預けていたカメラに興味を持ったらしい。“それはニコンですか？”彼はニューヨークで写真の勉強をするために、資金稼ぎのためにアルバイトをしているとのことだった。コペンハーゲンは物価が高い分、バイト代も高いのだと、しかもアルバイトはこの国の非常に高い税金をまったく払う必要がないので、ヨーロッパでは人気の場所なのだと教えてくれた。かれは、カメラのレンズに非常に造詣が深く、ライカやコンタックスの話題でもりあがった。私は、ここで始めてカールツアイスの本拠地が、実はイエナという東ドイツの町であることを知った。非常に楽しいひと時を過ごし、お互いの成功を祈りあって別れた。明日は、もう少し物価の安い西ドイツに戻ろう。

7:00 発の、コペンハーゲン発フランクフルト行きのメルクールという EC (ユーロシティ) に乗ることにした。今日からは、ユーレイルパスを使っての一等旅行である。なんとなく気持ちが弾んだ。初めて一等コンパートメントに乗る。しかし、乗ってしばらくして感じたのだが、連れがいないときにはコンパートメントはつらいものだと気がついた。話し相手がないのである。また、物思いにふけりたときも、なんとなく黙って乗っているのは、同室者に気まずい感じがするものだ。これから乗るときには 1 等のオープン座席の一人がけの席にしようと思った。

駅構内には、モスクワの行き先板が掲げてある客車もある。始発駅だけに、きっちり定刻に出発した。途中の風景は、いかにもデンマークが酪農の国であるかを物語る、のどかなものだった。途中、何度か長大な鉄橋で海を越えて、ロドビーからプットガルテンまでのフェーマルン海峡はスカンドライン・ドイチュランドのフェリーで越える。列車がそのまま船に乗る。東ドイツから

のフェリーもそうであったが、日本では青函連絡船が洞爺丸台風以来、鉄道の客車航送をやめてからはこのような光景は見られない。フェリーは、まさに西側諸国のもので豪華。バルト海の東ドイツのものとは比べ物にならない。甲板に出てみると、すばらしい青空で約一時間の船旅を楽しんだが、免税店で買い物をする人も多数いた。

対岸の西ドイツ、プットガルテンからは非電化区間を走る。ディーゼル機関車に引かれる。再び曇りがちになってきた。北ドイツの風景は、どこことなく荒涼としていたが、この天候もその気分に影響したものであろう。途中リュウベックを通る。

ハンブルグ中央駅着。この町は、ぜひとも訪れてみたい町であった。エルベ河沿いのロッテルダムと並ぶヨーロッパ 1.2 の港、河口まで 110km もある。やはり山育ちのせいか港町には、なぜか惹かれる。駅で両替する。使い切らなかった硬貨がどんどんたまる。せっかくだから記念にとっておこう。インフォメーションで、いつものごとくまず宿をとり市街地図をもらう。ここの地図もやはり立派なものだった。地下鉄に乗りレンヂュングスブリュッケ（上陸棧橋駅）近くのユースホステルに向かう。ユースホステルは **Auf dem Stintfang** という。地下鉄には自転車を持ち込む人もいる。日本とは異なる。駅から小高い丘に登り、港を見下ろすところにそれはあった。受付の際、英語の間違いを後ろに並んだ奴に馬鹿にされ非常に腹が立った。

初めて屈辱を味わった。このときの屈辱は、私のその後の英語習得の熱意高揚に少なからぬ影響を及ぼしている。気を取り直して、市内を散策した。飾り窓にもいった。ザンクトパウリ地区のヘルベルト通りというところだが、通りの入り口には鉄の門があり、レディはお断り(ダーメン・フェルボーテン)と書いてある。飾り窓をみて歩いたが、冷やかしたとわかると水をかけられるようだ。何人かが屋根から水をかけられていた。日本人である私は可能性を期待されていたのか、かけられなかった。相場は 100~200 マルクとのこと。

そこから、港へ坂道を下っていくと、何とも港町の風情の美しい町であった。ザンクトパウリ上陸棧橋から港湾一周の観光船に乗った。町の中には運河が入り組み、その間を縫うように船が走る。とても河口からずっと離れた港町とは思えなかった。



(ハンブルクの港：今市市在住の藤木さんが描いてくださった。)

疲れてきたので再びユースホテルに戻って一息入れた。どうもさっきの一件があつてから、ユースホテルの中では、みんなに馬鹿にされている気がしてすっきりしない感じではいたのだが、夕飯を食堂で食べていると、日本人に声をかけられた。彼は、慶応大学の出身でこれからアフリカに行く予定だといっていた。いかにも旅なれたサンダル姿で、いさいさか気が滅入っていた私には力強い味方であった。しばらく、楽しくお互いの予定やら話した後、二人でまたセックス地区にいてみることにした。ザンクトパウリ地区、さらにその近くの **Reeperbahn** (レーパーバーン) という大通り。飾り窓にもまた行った。

レーパーバーンでは日本語の客引きもいる。お兄さんオ〇〇〇どう？てな感じ。私がデンマーククローネ硬貨を持っているのがわかる と、それを非常に欲しがった。譲ってくれと引きさがる。そうすると余計あげたくなって、体よく断った。結局 2 人とも所詮、貧乏なバックパッカーであり、散々ひやかしかだして港にもどった。



(ハンブルクの港にて)

栈橋近くのバーに入ると人目でアル中とわかる女たちが飲んでいて、軽く言葉をかわし乾杯。その後は、このだ大海君と、しばしビールを飲んで楽しく過ごした。帰りにお金を払おうとしたら、どうもアル中女たちのおごりらしい。お礼を言って栈橋に行った。大海君は、今日の夜行で南下するらしいので、出発時間の間近まで付き合うことにした。栈橋で、お互いの写真を撮ったりして過ごした。楽しいひと時であった。かれはその後、スイス、フランス、モロッコ、エジプト、ギリシャ、トルコと回ったらしい。

7月18日になり、日本を出て2週間も過ぎたせいかさすがに旅慣れてきたのだが、いささかの疲れもたまってきた、大都市ではなく小さな町でゆっくり体を休めたいとなった。ここハンブルクのユースで次の目的地を考えていたのだが、ふとガイドブックのなかのリュエデスハイムという地名が目にとまった。ライン河畔のちいさなワインの町。ローレライも近い。宿も安くてよさそうなものがある。よし、決めた。今日は、リュエデスハイムまで行って、2泊くらい泊まろう。

ハンブルク発フランクフルト行のECに乗る。一等のオープン一人掛けにした。途中ブレーメン(ハンブルクに次ぐ第二の港として有名だがブレーメンの音楽隊の舞台としてのほうが有名)、ドルトムント、エッセン、デュッセルドルフ、ケルン等の有名な街を過ぎる。ドイツのルール工業地帯である。ケルンでは有名な大聖堂も見える。ホーエンツォレルン橋でライン川を渡る。オーデコロンとはフランス語で”ケルンの水”の意味。ナポレオンの時代に、ケルンにいたフランス兵が、里帰りするときに、妻や恋人にこの”ケルンの水”をもって帰ったの

がそのいわれのような。今でも、香水産業が盛んなようで、4711 ポーチュガルというオーデコロンは有名だ。

連邦政府の首都ボン（ベートーベンの生誕地）を経て、マインツ（活版印刷を発明したグーテンベルグの出身地。）でおりる。このあたりまでくると北ドイツのなんとなく寒々とした雰囲気から、南ドイツの暖かい雰囲気が漂っている。太陽の光も柔らかいである。

ローカル列車に乗ってライン川を渡りヘッセンの州都ビースバーデンへ。更に乗り換えてリュードスハイムに着いた。天気もよく、のどかな川沿いの風情は、故郷の只見川沿いの只見線の風景とも会い通じるものがあり、気持ちがほぐれた。約 30 分ほどでリュードスハイムに着いた。のどかなワインの街。宿は予定通りの Pension Nagler というペンションにした。ほっと一息。

この宿は、ガイドブックに書いてあったとおりの安くてきれいなすばらしいペンションであった。部屋についているバスルームにはなんとバスタブもあるではないか。風呂に入るのは実に久しぶりである。まず、洗濯をして、2 週間、履き通しだった靴を洗った。

そして湯船に湯をはって、入る。至幸のひと時である。旅の疲れが一気に吹っ飛んだ。

靴が乾くまでの間、ゆっくり部屋で過ごす。このあたりも日没は夜の 10 時くらいだから、

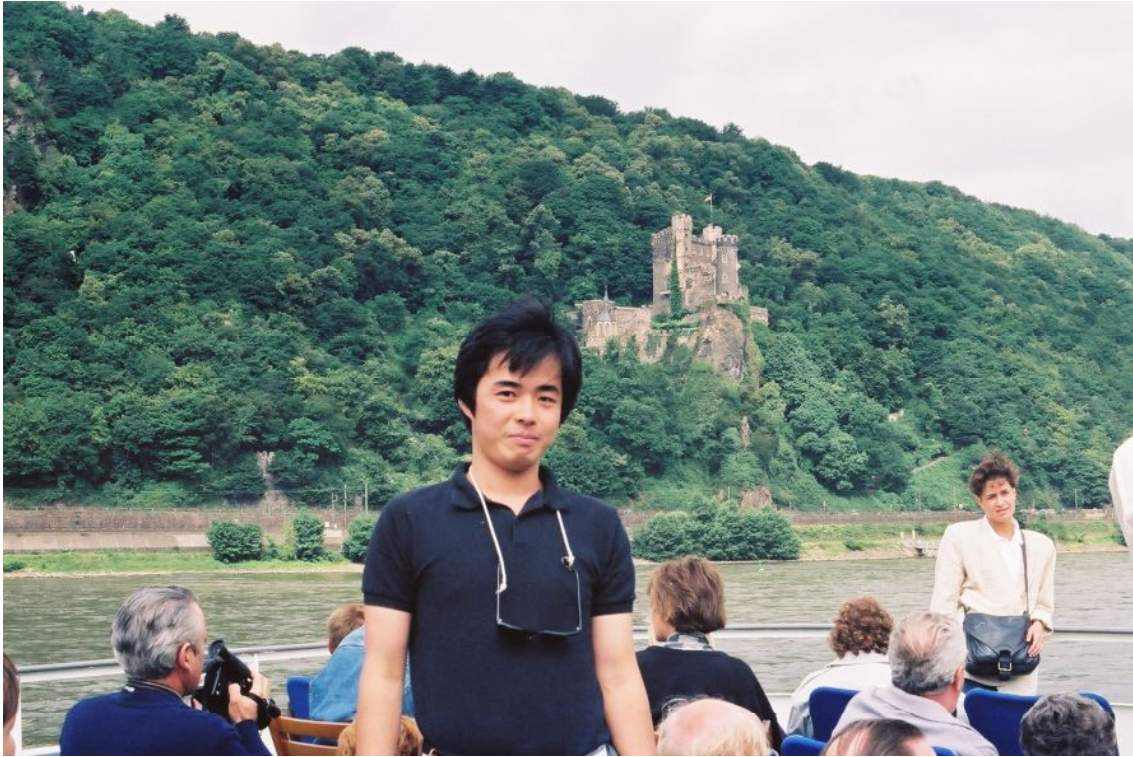
ゆっくりしてからでも町の散策はできる。ベッドに寝転がりながら、明日の予定を考えた。

せっかくライン川の畔に来たのだから、ライン下りはしたい。ここリュードスハイムにも乗船桟橋があるし、またうれしいことにユーレールパスが効くのだ。あすは、コブレンツまで下って、町を散策した後、ラインの右岸（左岸のドイツ国鉄の本線と異なり、こちらはローカル線である。）を戻ってこよう。しばしまどろんだ後、靴も半乾きであったが

町に出ることにした。なんとゆったりとした時間。町はブドウの香りが漂っており、ローレライの音楽が流れている。川沿いのレストランで食事。シュティムト・ショーン（つりはいらぬよ。）が決まる。ゆったりとしたラインの流れに、柔らかな日差し。すばらしい町だ。

川沿いの土産物屋には、ヘンケルやらゾーリングゲンやらのナイフやアーミーナイフが並んでおり、食指が動かされたが、日本からすでにアーミーナイフを持ってきており無駄遣いとおもって我慢した。もし持ってこなかったら、いずれ役に立つだろうと買ってしまったに違いない。駅でビールを買って（驚くほど安い）ペンションに帰って休んだ。

翌日は、予定通りケルン・デュッセルドルフ汽船会社の観光船に乗る。近代的なきれいな豪華客船だ。ビンゲン、バッハラハ、ザンクトゴア、ボッパルトと小さな港に立ち寄る。川沿いに古城が散在する。ネズミの塔-最も美しいと言われるラインシュタイン城-プファルク城-シェンブルグ城-ローレライ-ネコ城（フォン・カツェネルンボーゲン伯所有の城塞：1806年にナポレオンの侵攻で落城 1898年に改修）ライン左岸を、ドイツ連邦鉄道の優等列車が通過するのが見える。ルフトハンザドイツ航空が運営するデュッセルドルフ発フランクフルト行の豪華列車も通過する。頭でイメージしていたのと同じ風景。ただローレライは何の変哲もないただの崖であった。



(ライン下りの船上にて)

ローレライ伝説とは：シェーンブルグ城内に美貌の 7 人娘がいた。彼女たちに求婚する男は数多くいたが、娘達は、こうした求婚者達をしばらくの間、場内にひきとめ、思わせぶりな態度をとったあげく追い出すのが常であった。こうした男の中にヴァルターと言う男がいた。豎琴の名手であったかれは、他の男よりも長く場内にとどまることができた。やがてヴァルターは、7 人のうちアーデルグンデという娘の心ありげな振る舞いに、すっかり本気になってしまった。しかし彼もいよいよ結婚と言うときになって捨てられてしまう。心をもてあそばれ、絶望のヴァルターはライン河に身を投じる。ヴァルターは妖精に連れられ水底の宮殿へ。宮殿の女王は、哀れなヴァルターの身の上話に心を痛める。やがて女王は小舟に乗って遊ぶ 7 人娘の前に姿を現す。”自分以外に何者も愛することを知らない情け知らずの姉妹ども。おまえ達の心のように石になっておしまい。”女王が叫ぶと、7 人の姉妹達は岩となってしまった。以来、ローレライと言われるこの岩の周辺は、船の難所になってしまった。岩の上に美女が現れ、これに見とれた船の舵とりが操作を誤ってしまうらしい。

また、この周辺はワーグナーの歌劇”ニーベルングの指輪”で有名なラインの黄金伝説もある。そういえば、今はないが、かつてのドイツの最上級列車の名前は”ラインゴールド”であった。

さまざまな思いをめぐるせながら、優雅に時を過ごしコブレンツまで行った。ここはライン川とモーゼル河の合流点。マルクスブルグ城が見える。町を散策しながら駅に。駅のマクドナルドで昼飯を食べながら、次の目的地を考えた。スイスまでいってしまおうと考えていたが、さてどこにしようか。スイスは物価が高いと聞いていたし、長居はできない。まあ一箇所だけに絞るとしたらと、いろいろ考えていたら次に行こうと思っていた、スペインか

イタリアのいずれにもアクセスがよいジュネーブという案が浮かんだ。ここは国連ヨーロッパ本部もあり、レマン湖のほitoriということも魅力的だ。

コブレンツの駅で翌日のジュネーブへの連絡を教えてもらおうジュネーブと言っても通じない。アイネ・シュタット・イン・シュバイツ（スイスの1都市だ）と言ったらゲンフとドイツ語では言うのだと教えてくれた。明日の目的地も決まってしまうと、気が楽になり、ローカル列車に乗ってラインの右岸をリュエデスハイムに戻った。近くの山の上に記念碑と展望台があり、そこまでロープウェイがあるようなのでいってみた。Niederwald-Denkmat という。

ラインの眺めは、最高。天気もいいし気分がいい。下には、悠久のライン河の流れ。高校時代に英語でローレイのことを習ったときに、思い浮かべたのと同じ風景である。さすがに大河で、貨物船も頻繁に通る。しばし景色に見とれて過ごした後、夕飯を食べて宿に戻った。宿では、女将さんが庭掃除をしておりゲーテン・ターク（こんにちは）と挨拶をかかわす。きれいなペンションで気持ちのいい休日を過ごすことができた。



（丘から望むライン川の雄大な流れ）

翌日は、やはりライン右岸のローカル線にのりコブレンツからベルン行の EC に乗る。途中、マンハイム、カールスルーエ、バーデン・バーデン（北シュバルツバルドの代表都市、ドイツ屈指の温泉保養地）、フライブルク（有名な大学都市、ハイデッカーもここで教授をしていた。またマリー・アントワネットはこの地からフランスに向かった。）を通る。

天気は非常によく、このあたりがシュバルツバルト（黒森）なのだろうと、想像しながら車外の景色を眺める。徐々に、景色が山の風情に変わるとスイスのバーゼルへ。バーゼルにはドイツ駅、スイス-フランス駅がある。バーゼルからスイスの首都ベルンへ。駅は超近代的。

乗り換えてジュネーブ行へ向かう。陽光まばゆい山岳地帯を、真新しいスイスのインターシティが快走する。ローザンヌを過ぎるとレマン湖が見える。このあたりからはフランス語圏で、言葉が違うからなのか、風土が違うからなのかわからないがなんとなく雰囲気が異なる。パリまで何キロの道路標識も見えるし、駅の標識や広告も今まで見慣れていたドイツ語ではなくフランス語である。レマン湖を左に眺めながらジュネーブ（コルナパン駅：ガール・ドゥ・コルナパン）に到着する。

まずスイスフランに両替してホテルを探すが、安宿はない。手当たり次第に、電話ボックスからホテルに電話するがこちらの要求を満たすものはない。挙句のはてに、ジュネーブにはそんなホテルはないよといわれた。さてどうしたものかと地球の歩き方を眺めていると、近くにニヨン（かなり古い歴史を持つという）町があり、そこに安くていいホテルがあるとかいてある。とにかくそこに行ってみよう。ローカル列車に乗ってニヨンに向かう途中、最初満員だったが 2 駅目ぐらい皆降りてしまい。わたしのボックスには若い美しい女性と私だけになってしまった。お互いだまっているのも何だか気まずいので、“ニヨンまでどのくらいかかるでしょう？”と聞いてみた。

（ニヨンにて、レマン湖、モンブラン方向を望む）



するとかばんの中から、ポケット時刻表（日本でも新幹線の簡単な時刻表があるが、そのようなもの）を出して調べてくれた挙句、それを私にくれるという。ありがたく頂戴した。これは、その後も非常に重宝した。彼女が“国籍はどちらなの？”と聞くので、“日本だよ”と答えるとなぜか喜んでくれた。彼女はポーランド国籍でジュネーブ大学に留学中らしい。むかしから、ロシアに勝った唯一の国は日本だけだとしてポーランド、フィンランド、トルコなどでは親日感情が高いと聞くがやはりそうなのだろうか。しばし、ショパンの話などをして盛り上がった。ニヨ

ンの手前の駅で彼女は降りていった。ボン・ボワイヤー・ジュ！オ・ルボワー（よいご旅行を、さようなら）とさすがにフランス語のお別れであった。何と気持ちのいいこと。まわりの景色まですばらしく思えてきた。ニヨンのホテルは **Relais du Mont-Blanc** といい一泊 35 フラン（3500 円相当）。これもまた予想以上にすばらしいホテルであった。最高に良かった。レマン湖のほとりに行く。モンブランが見えた。きれいな夕暮れ時のレマン湖。湖をわたる風も気持ちがいい。

翌日は、このホテルもよかったがジュネーブの町にもかなり惹かれるので、ジュネーブのユースホステルに泊まることにした。ジュネーブは、人口 17 万人の半数以上が外国人という国際都市。国連ヨーロッパ本部や、多数の国際機関が存在する。またジャン・ジャック・ルソーの生誕地でもある。

朝食を済ますとまたローカル列車でジュネーブに。途中の駅の広告もフランス語でおしゃれ。モンブラン通りの赤いバスを改造した案内所に行ってみる。ユースホステルの場所を聞き、また例のごとく市外地図をもらいユースホステルに。さすが上品な町のものだけあってきれいである。受付のときにぎやかな女の子集団がいて、彼女たちのパスポートを見せてもらったら、オーギーギャルでみんな写真がいろいろなポーズでとられていて、われわれの固い表情の写真と異なり、非常に明るく開放的な印象であった。また、そういえば香港からの旅行者が結構めだち、彼らはとにかくよくしゃべるという印象であった。

市外観光はあとでもゆっくりできるので、荷物を預け、再び列車に乗りモントルー・ジャズフェスティバルで有名な、そして保養地として名高く有名人の別荘も多いモントルーへ、そしてそのそばのシヨン城（バイロンの詩で有名：シヨンの囚人。宗教改革者フランソワ・ド・ボニヴァルが地下牢につながれていた）に行ってみる。モントルーはフルトベングラーも晩年をここで過ごした町らしい。確かに高級なリゾートのようだ。シヨン城はちっぽけな城で絵になる風景ではあるが、なんということはない。シヨン城からレマン湖沿いにモントルー駅まで 2 キロくらい歩く。途中老齢の外国人夫妻に話しかけられ、しばらくお付き合いをして話をしてしたが、あまりに歩調がゆっくりなのでどうしたものかと思っていたら、向こうからお先にどうぞ。楽しかったよ、ありがとうといってくれた。再びインターシティに乗りジュネーブに戻る。

ジュネーブ駅の別なホームにはミラノ中央駅行のジザルピーノが停車しており次の目的地をミラノにするかどうか迷う。確かにモードの発信地というミラノの町も捨てがたい。まあ今日の夜、ゆっくり考えるとして街をぶらつこう。やはり、予想通り物価は高い。ラーメンが無性に食べたくなり探したが日本円にして 1400 円程度。食べるのをやめた。マクドナルドのセットが 720 円相当。それで我慢我慢。ちなみにパリでは 280 円位だった。

トイレに行きたくなったので、通りがかりの人にフランス語で聞いてみた。“エスキリヤ・ユヌ・トワレ・アコテディシ？”（近くにトイレはありますか？）果たしてフランス語で答えが返ってきたが、どうも“ジュネーブには公衆便所がないので駅に行きなさい”。とっているようで、“ガール”（駅）という単語だけは、明瞭に聞き取れた。ジュネーブの市民レベルは、非常に高いと聞いていたが、親切だし確かにそのようだ。“メルシー・ボークー”（ありがとう）といっ

て別れる。

(下：レマン湖とシオン城)



散策途中、身なりのいいインドネシア人と仲良くなり話が弾んだ。彼に、日本では首相が女性問題で引退したことを教えて貰った。後で、マドリッドで日本の新聞や、雑誌を見る機会があった。時の宇野首相が女性スキャンダルで引退したのであった。彼にどこに泊まるのかと聞いたら、ホテル・プレジデント（高級ホテルである）と答えが返ってきてあえて聞かなかったが、身なりから言っても政府の要人だったのかもしれない。ユースホステルに戻るといい加減疲れてきたので、自分のベッド（二段ベッドの上段、下の段は北アフリカ系の黒人の人だった。）に横たわり次の行き先を考えた。当初の予定通りスペインにするか、いやイタリアにするか。話によると、どうもスペインは治安があまりよくなさそうだ。しかし、本場でフラメンコギターの調べを聞くのが目的であった。散々悩んだが、スペインに行くことにし、最初の訪問地はバルセロナにした。そうと決まると、急に眠くなり寝てしまった。

スイス最後の日、まずはジュネーブ駅に行ってポート・ボウ（スペインの国境の駅）行きの寝台列車のチケットを取る。2等はすでに売り切れており、1等しかなかった。まあ、それでもそんなに高くはないし、まずは安心とコインロッカーに荷物を預けて、ジュネーブ市内散策をした。まず駅の裏手の国連ヨーロッパ本部（パレ・デ・ナシオン）に行く、せっかくなのだから英語のツアーガイドのコースに入った。かつての国際連盟本部、いまの国際連合ヨーロッパ本部である。本会議場など、いろいろ案内してもらった。

そのあとは宗教改革者カルヴァンが説教を行ったサンピエール聖堂に登る。高台の上にある塔なので見晴らしがよい。そこからは右手にフランス領の山々、左手にジュラ山脈、間にレマン湖、

袂にジュネーブの街、140mの大噴水も見える。そこから英国公園にくんだり、ローヌ河の流出口、ローヌ通りの時計の店。ジュネーブ大学。宗教改革記念碑を見る。ジュネーブにも市電があった。それでも列車の発車は夜遅くなので（とはいっても、10時くらいまでは明るいのである。）更にローザンヌに足をのばす。通いなれたルートをインターシティでローザンヌへ。
（下：坂の多い、ローザンヌの町並み）



ローザンヌは国際オリンピック委員会の本部があり、また世界各国の金持ちの別荘が集まる観光保養地で教育分化の中心都市である。駅を降りて坂道を上るとカテドラル、スイスで最も美しい教会と言われるが、入ってみると 聖歌隊が歌を歌っていて、いい雰囲気。優雅な町である。ローザンヌで夕飯を食べていよいよジュネーブの駅に。ローザンヌの駅にオリエント急行(V.S.O.E Venice Simplon Orient Express)が停車していた。先にも書いたがローザンヌからジュネーブにかけてはP a r i sまで何キロという標識も多くまさにフランス語文化圏であることを実感する。ジュネーブの駅で、コインロッカーの荷物をとりホームに向かう。列車はこの7番線から発車する。ここはフランスへの優等列車が発車するが、すぐにフランス国境なのでホームに入る前に出入国手続きがある。7番線はほとんどフランスの雰囲気。TGVも発着する。

ポート・ボウ行の夜行急行 21:31 分発 HISPANIA EXPRESS。一等クシェッタは上下2段ベッドで日本のB寝台のよう。同室は、ドイツのハノーバーからスペインに帰る父親と20歳の娘さん2人の3人連れ。長話はせずに good night を言って眠った。うとうとしていると列車は出発、これからローヌ川の流れに沿って山を下り、リヨンなどを深夜に通過し、明日朝 5:47 にはスペイン国境を越え、ポート・ボウにつくはずである。いよいよ情熱の国スペインの旅が始まるのである。